

蒲生干潟で見られる野鳥とそれらを支える生態系10



図1,2 オオヨシキリ

ヨシ原の中で盛んにさえずっている



図3 ムクドリ

十数羽で群れていた



図4 チドリ科

単独で餌を探していた



図5,6 ノスリ

羽ばたきたながらホバリングしている



図7,8 トビ

地上で留まっている様子が多く見られた

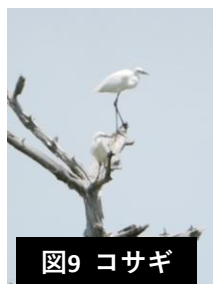


図9 コサギ

高い木の枝に止まって休んでいる

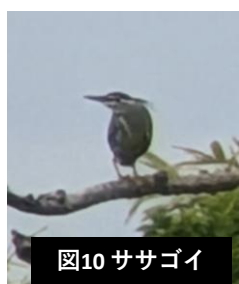


図10 ササゴイ



図11 ボラ

潟湖の浅瀬で多く見られた



図12 アシハラガニ

素早く動き回って巣穴に逃げ込む



図14 アミスギタケ



図15 サクラコガネ幼虫



図16 ハマダンゴムシ



図17 ゴミシダマシのなかま

分解者

調査日 2026年6月8日(月) 9:45~12:45

ヨシ原のいたる所でオオヨシキリの賑やかな声が聞こえていた。潟湖北側の松林周辺ではムクドリが1本の木に多数群れて止まっていた。防潮堤の上では羽ばたきながら空中で静止し、獲物を探しているノスリが見られた。しばらく静止したあと付近の電柱に止まり、またホバリングして獲物を探す行動を繰り返していた。この日は流木の上に止まって休むトビの姿が多く見られた。高い木の上に止まるサギ類(図9、10)はボラの稚魚(図11)やアシハラガニ(図12)など甲殻類を狙っている。陸上には数羽のミズナギドリのなかまと考えられる死骸が数か所で見られた。目立つ外傷が見られない個体は、数日前に通過した台風6号の影響で渡りの途中で力尽き漂着した可能性が考えられる。また、周囲に根元から抜かれた羽根が散乱していた死骸は、トビやカラスなどに食べられた跡だと考えられる。そして今後は多くの生物にとっての貴重なエネルギー源となっていく。図14は砂浜の流木に生えたアミスギタケと思われる菅孔類のキノコである。図15は流木の下にいたサクラコガネ類の幼虫、図16は身近に見られるオカダンゴムシの2倍ほどもある海浜性のハマダンゴムシ、図17はマルセルエグリゴミシダマシと思われる。これらは皆、流木や朽木を分解する分解者であり蒲生干潟の生態系を支えている生きものたちである。(伊藤勝彦)